正誤表 「共形場理論を基礎にもつ量子重力理論と宇宙論」

2019 年 11 月版 浜田賢二

内容の変更を伴う大きな訂正ではありませんが、特に注意して欲しいところは p.28, p.34, p.40, p.48b, p.56, p.57-58, p.72b, p.73a, p.73b p.83a, p.83b, p.117, p.143, p.154, p.157, p.180, p.181, p.204, p.216, p.223, p.239, p.240, p.241, p.264, p.267, p.292, p.305, p.311, p.312, p.319, p.321, p.333, p.344, p.351ab, p.354a-355, p.354b, p.358, p.368 です。一部補足を含みます。その他の誤植は文脈から容易に推測できるものです。また p.288a-d, p.291, p.355, p.356ab の誤植はすべて p.351ab の誤植に由来するものです。

第 1,2,3,4 章

- p.5 第 1.3 節の 8 行目: 現れるの不定性 → 現れる不定性
- ullet p.9-17 引数を明記した関数 Ω のべき乗の表記の変更: 例えば, $\Omega(x)^2 \mapsto \Omega^2(x)$
- p.12 脚注 5 の文章中: (1/2,0) と (1/2,0) → (1/2,0) と (0,1/2)
- p.14 上から 2 番目の式中: $O_{\lambda_1\cdots\lambda_{i-1}\sigma\lambda_{i+1}\cdots\lambda_l}\mapsto O_{\lambda_1\cdots\lambda_{j-1}\sigma\lambda_{j+1}\cdots\lambda_l}$
- p.19 上から 2 番目の式のすぐ下の文章中: $\lim_{\Delta \to 1} (\Delta 1) \theta(-k^2)^{\Delta 2} \mapsto \lim_{\Delta \to 1} (\Delta 1) \theta(-k^2) (-k^2)^{\Delta 2}$
- p.28 上から 2 番目の式中: $\frac{\partial y_{\nu}}{\partial x_{\mu}} \frac{\partial}{\partial y_{\nu}} \mapsto \frac{\partial y_{\sigma}}{\partial x_{\mu}} \frac{\partial}{\partial y_{\sigma}}$
- p.34 最初の式中: $\sum_{l=2n} \mapsto \sum_{\Delta,l} (=2n)$
- p.40 上から 1 番目と 4 番目の式中: $|\Delta,l\rangle\langle\Delta,l|\mapsto\sum_n|n;\Delta,l\rangle\langle n;\Delta,l|$ [ここで、 $|n;\Delta,l\rangle$ は規格化された $|\Delta,l\rangle$ の第 n デッセンダント状態である。デッセンダントを生成する並進の演算子 P_μ は C_2 と可換なので、この修正による第 3.7 節の結論の変更はない。]
- p.43-44 第 3.8 節の最後の二つの段落中: 前節 → 前章
- p.48a 最初の式群に続く文章中: 負の摂動を書ける → 負の摂動をかける
- p.48b 脚注 6 の補足: この疑問を解消する最近の成果として S. Rychkov and Z. Tan, J. Phys. **A48** (2015) 29FT01 と R. Gopakumar *et al*, Phys. Rev. Lett. **118** (2017) 081601 の 2 つの論文を挙げておく。
- p.51 最初の式中: L-2 → L-2
- p.54 上から 12 行目: SOS → SOS
- p.56 上から 3 番目の式中: $\tau_2 \mapsto \operatorname{Im}(\tau)$
- p.57-58 第 4.3 節内の式及び文章中: $\phi \mapsto \varphi$ (但し、脚注 6 中の ϕ は OK)

第 6.7.8 章

- ullet p.72a 脚注 2 の文章中: $Q=\sqrt{b_{
 m L}/2}$ をある。 $\mapsto Q=\sqrt{b_{
 m L}/2}$ である。
- p.72b (6-6) 式の $I_{\rm gh}$ 作用の符号: $i\mapsto -i$
- p.73a 上から 2 番目の段落中: その他の場の $b_{\rm L}$ への \mapsto その他の場の $b_{\rm L}'$ への
- p.73b 脚注3の文章の最後: (5.2 節を参照) → (6.2 節を参照)
- p.77 脚注 5 の文章中: 自由ボゾン場を表示を → 自由ボゾン場表示を
- p.93 上から 3 番目の式中: P_v → P_v
- p.83a 脚注 14 の参考文献の番号: **B324** (1994) 278 → **B324** (1994) 141
- p.83b 上から 5 行目の文章中: 成り立つことが分かる → 成り立つことから分かる
- p.102 (7-21) 式中: $\Delta^{ij} \mapsto \Delta_{ij}$

- p.117 最初の式のすぐ下の文章への補足: $[0,4\pi]$ である。 $\mapsto [0,4\pi]$ である $(\gamma$ の 領域が 2 倍なので半整数表現が入る。領域が 2π までだと空間は $RP^3=S^3/Z_2$ になる)。
- ullet p.120 最初の式のすぐ上の文章中: $Y^i_{J(my)}\mapsto Y^i_{J(My)}$
- p.132 (8-18) 式中: $\zeta^{\mu}\hat{\nabla}\phi \mapsto \zeta^{\mu}\hat{\nabla}_{\mu}\phi$
- ullet p.136 下から 2 行目の文章中: Hamilton 演算子 $H\mapsto {
 m Hamilton}$ 演算子 $H^{
 m gh}$
- p.140 下から 8 行目の文章中の式: T_{uν} → Θ_{uν}
- p.143 中頃の文章中の式: $\mathbf{E}_{1(N_1x_1),1(N_2x_2)}^{1N}c_{1(N_1x_1)}^{\dagger}c_{1(N_2x_2)}^{\dagger}|\Omega\rangle\mapsto\sum_{N_1,x_1}\sum_{N_2,x_2}\mathbf{E}_{1(N_1x_1),1(N_2x_2)}^{1N}|\Omega\rangle$

第 9.10 章

- p.154 (9-4) 式中: $\nabla^2 H^2 \mapsto \nabla^2 H$
- p.157 下から 2 行目の文章中: それは相関関数の中で → それは基本場の相関 関数の中で
- p.162 最後の式中: $\Theta_{gf}^{\mu\nu} \mapsto \Theta_{g,f}^{\mu\nu}$
- p.168 上から 2 番目の式中: $\frac{\delta P(x)}{\delta \chi(x)} \mapsto \frac{\delta P(y)}{\delta \chi(x)}$
- p.170 下から 3 番目の式中: $\frac{\partial}{\partial A_{0\mu}(x)}\mapsto \frac{\delta}{\delta A_{0\mu}(x)}$
- p.180 下から 2 番目の式中: $\nabla^2 H^2 \mapsto \nabla^2 H$
- p.181 第 9.7 節の最初の式の最後から 2 番目の項: $-\frac{2}{9}(R^{\mu\nu}-\nabla^{\mu}\nabla^{\nu}R)\mapsto -\frac{2}{9}(R^{\mu\nu}R-\nabla^{\mu}\nabla^{\nu}R)$
- p.188 上から 5 行目: 大きい N 展開 → ラージ N 展開
- ullet p.192 (10-19) 式中の $\sqrt{\hat{g}}$ は不要 (この章では平坦な背景時空を考えている)。
- p.204 上から 3 行目と 4 行目の文章中の 2 式: $\hat{g}_{\mu\nu}=(e^{t\hat{h}})_{\mu\nu},\,\hat{h}_{\mu\nu}=Z_{\hat{h}}^{1/2}\hat{h}_{\mu\nu}^r$ $\mapsto \hat{g}_{\mu\nu}=(e^{t_0\hat{h}_0})_{\mu\nu},\,\hat{h}_{0\mu\nu}=Z_{\hat{h}}^{1/2}\hat{h}_{\mu\nu}$
- p.216 $\Lambda_{\rm QG}$ についての補足: 観測可能な物理量はくり込み群不変でなければならない。このスケールは真に $\mu d\Lambda_{\rm QG}/d\mu=0$ を満たすくり込み群不変量である。
- p.218 中頃の文章中の 2 式: $\bar{\gamma}_{\rm EH} = \mu d(\log Z_{\rm EH}) d\mu, \ \bar{\gamma}_{\Lambda} = \mu d(\log Z_{\Lambda}) d\mu \mapsto \bar{\gamma}_{\rm EH} = \mu d(\log Z_{\rm EH}) / d\mu, \ \bar{\gamma}_{\Lambda} = \mu d(\log Z_{\Lambda}) / d\mu$
- p.223 有効ポテンシャルがくり込み群不変な物理的宇宙項になる。それに関する 最近の見解は K. Hamada and M. Matsuda, *Physical cosmological constant* in asymptotically background-free quantum gravity, Phys. Rev. D **96** (2017) 026010 を参照。
- ullet p.224 最初の式の 2 列目: $\log z^2 \mapsto \log rac{z^2}{\mu^2}$

第 12,13,14 章

- p.239 (12-8) 式中: $-3H_{\rm D}^2H^2 + \rho \mapsto -3H_{\rm D}^2H^2 + \frac{8\pi^2}{b_c}\rho$
- p.240 膨張率 \mathcal{N}_e についての補足: 相転移時 τ_Λ までの膨張率 $\mathcal{N}_e=65$ とその後 Friedmann 時空に落ち着くまでの膨張率 (12.2 節参照) を加えた実質的な膨張率は $\mathcal{N}_e \simeq 70$ になる。スケール因子ではおよそ 10^{30} 倍に相当する。以下の宇宙の進化の説明ではこの値が用いられている。
- p.241 図 12-1 の縦軸: $\log_{10}[a(\tau)/a(\tau_{\Lambda})] \mapsto \log[a(\tau)/a(\tau_{\Lambda})]$
- p.264 図のすぐ下の文章の 2 行目: 時間が経って 1(2) より小さくなれば \mapsto 時間が経って 1(2) より大きくなれば

- p.267 下から 2 番目の式中: $\mathcal{D}^c = -\frac{9}{8}\Psi_i \cdots \mapsto \mathcal{D}^c = -\frac{9}{2}\Psi_i \cdots$
- p.283 上から 2 行目: Riegert 場 → 共形因子場
- p.288a 最初の式中: $=2\Delta_{ii,kl}\mapsto =8\Delta_{ii,kl}$
- p.288b 最初の式直下の文中式: $h^{\mathrm{TT}}=tH/\sqrt{2}\mapsto h^{\mathrm{TT}}=tH/\sqrt{8}$
- p.288c 2 番目の式中: $-\frac{t_i^2}{32\pi^2} \mapsto -\frac{t_i^2}{128\pi^2}$
- p.288d 3番目の式中: $\frac{t_i^2}{16\pi^2} \mapsto \frac{t_i^2}{64\pi^2}$
- p.291 最後の行の文中式: $t_i/4\pi\mapsto t_i/8\pi$
- p.292 中頃の文章中: への傾斜 (red-tilt) が生じる → へ緩やかに傾斜 (red-tilt) したものになる
- p.294 上から 2 行目: 採用したと m = 0.0156 と \mapsto 採用した m = 0.0156 と

付録 A,B,D,E,F

- p.300 (A-3) 式中: $\sqrt{-\hat{g}} \mapsto \sqrt{-\bar{g}}$
- p.301 上から 2 番目の式群中: $\bar{R}^2 = \partial_\mu \chi_\mu \partial^\nu \chi^\nu \mapsto \bar{R}^2 = \partial_\mu \chi^\mu \partial_\nu \chi^\nu$
- p.303 最後の式中: $\nabla_{\mu}V_a=\partial_{\mu}+\omega_{\mu a}{}^bV_b\mapsto \nabla_{\mu}V_a=\partial_{\mu}V_a+\omega_{\mu a}{}^bV_b$
- p.305 上から 4 行目の文章中: $\nabla_{\mu}\gamma^{\nu} = \gamma^{a}\nabla_{\mu}e^{a}_{a} = 0 \mapsto \nabla_{\mu}\gamma^{\nu} = \gamma^{\nu}\nabla_{\mu}e^{a}_{a}$ [詳しく書くと、 $\nabla_{\mu}e^{a}_{a} = 0$ より、 $\nabla_{\mu}(\gamma^{\nu}\psi) = e^{\nu}_{a}\nabla_{\mu}(\gamma^{a}\psi) = e^{\nu}_{a}[\gamma^{a}\partial_{\mu}\psi + \omega_{\mu}^{\ a}_{\ b}\gamma^{b}\psi + \frac{1}{2}\omega_{\mu cd}\Sigma^{cd}\gamma^{a}\psi] = e^{\nu}_{a}\gamma^{a}(\partial_{\mu} + \frac{1}{2}\omega_{\mu cd}\Sigma^{cd})\psi = \gamma^{\nu}\nabla_{\mu}\psi$ となる。ここで、 $[\Sigma^{cd},\gamma^{a}] = \eta^{da}\gamma^{c} \eta^{ca}\gamma^{d}$ を使っている。]
- p.311 脚注 2 の文章:指数がゼロになって第 1 項も定数になる。→ 指数がゼロになるが、対数発散する。
- p.312 臨界指数 δ を導出する式中: $M\sim h imes \xi^{D-\Delta_\sigma}\sim\mapsto M\sim h imes \xi^{D-2\Delta_\sigma}\sim$
- p.315 最後の式群のすぐ上の文章中: の変観測を → の変換則を
- p.317 上から 4番目の $D^{\frac{1}{2}}_{mm'}$ の表式中: $X^0, X^1, X^2, X^3 \mapsto X_0, X_1, X_2, X_3$
- p.319 下から 2 番目の式中: $\sum_M Y_{JM}(\hat{\mathbf{x}})Y_{JM}(\hat{\mathbf{x}}')\mapsto \sum_M Y_{JM}(\hat{\mathbf{x}})Y_{JM}^*(\hat{\mathbf{x}}')$
- p.321 (B-13) 式中: $\psi \mapsto \hat{\nabla}_j \zeta^j$
- p.322 上から 4 番目の式中: $i[Q_{\zeta}A_i]\mapsto i[Q_{\zeta},A_i]$
- p.322 下から 2 番目の式群中: $\gamma_{ij} \mapsto \hat{\gamma}_{ij}$
- p.324 上から 2番目の式群中: $\sum_{M_2x_2}, \sum_{M_2y_2} \mapsto \sum_{M_2,x_2}, \sum_{M_2,y_2}$
- p.333 Wigner D 関数の定義の補足: $\langle J,m|e^{-i\alpha J_3}e^{-i\beta J_2}e^{-i\gamma J_3}|J',m'\rangle=\delta_{JJ'}D^J_{m,m'}(\alpha,\beta,\gamma)$ ここで, $[J_a,J_b]=i\epsilon_{abc}J_c$
- p.336 ガンマ行列の公式中: $tr(I) = 4 \mapsto tr(1) = 4$
- p.344 脚注 6 の文章中の名前: G. Vilkovsky → G. Vilkovisky
- p.345 上から 3 番目の式のすぐ上の文章中の式: $x^a x^b \partial_a \partial_a \phi \mapsto x^a x^b \partial_a \partial_b \phi$
- p.351a 最初の式中の最後の項: $\partial_{\eta}h_{ij}^{\mathrm{TT}}n^{i}n^{j}\mapsto \frac{1}{2}\partial_{\eta}h_{ij}^{\mathrm{TT}}n^{i}n^{j}$
- p.351b (E-4) 式中: $\partial_{\eta} h_{ij}^{\mathrm{TT}}(\eta, \mathbf{x}(\eta)) n^{i} n^{j} \mapsto \frac{1}{2} \partial_{\eta} h_{ij}^{\mathrm{TT}}(\eta, \mathbf{x}(\eta)) n^{i} n^{j}$
- p.352 (E-6) 式中: $\sum_{m=-l}^{m} \mapsto \sum_{m=-l}^{l}$
- p.354a-355 文章中の $d\Omega_k$ の定義式: $d\Omega_k = d\theta_k d\varphi_k \mapsto d\Omega_k = d\cos\theta_k d\varphi_k$
- p.354b 中頃の文章中の P_s の直後に次の式を追加: $P_s = A_s(k/m)^{n_s-1}$
- p.355 (E-12) 式の右辺: $\times \langle \partial_{\eta} h_{ij}^{\mathrm{TT}} \cdots \rangle \mapsto \times \frac{1}{4} \langle \partial_{\eta} h_{ij}^{\mathrm{TT}} \cdots \rangle$
- p.356a (E-13) 式の左辺: $\langle h_{ij}^{\rm TT} \cdots \rangle \mapsto \frac{1}{4} \langle h_{ij}^{\rm TT} \cdots \rangle$

- p.356b 脚注 3 の中の 3 式: $= 4\langle h^{\mathrm{TT}}(\eta,\mathbf{k})\cdots\rangle,\ h^{\mathrm{TT}}_{11} = -h^{\mathrm{TT}}_{22} = h_+,\ h^{\mathrm{TT}}_{12} = h_{\pm}^{\mathrm{TT}}_{21} = h_+,\ h^{\mathrm{TT}}_{12} = h^{\mathrm{TT}}_{21} = h_{\times} \mapsto = 16\langle h^{\mathrm{TT}}(\eta,\mathbf{k})\cdots\rangle,\ h^{\mathrm{TT}}_{11} = -h^{\mathrm{TT}}_{22} = 2h_+,\ h^{\mathrm{TT}}_{12} = h^{\mathrm{TT}}_{21} = 2h_{\times}$
- p.358 中頃より下の文章中の P_t の直後に次の式を追加: $P_t = A_t (k/m)^{n_t}$
- p.364 相対論と宇宙論の本の下から 2 番目: 共立出版。2014). → 共立出版、2014).
- p.368a 参考文献の著者名: A. Strabinsky \mapsto A. Starobinsky
- p.368b PRD に掲載 → Phys. Rev. D **93** (2016) 064051 (p.220 脚注 18 も 同様)